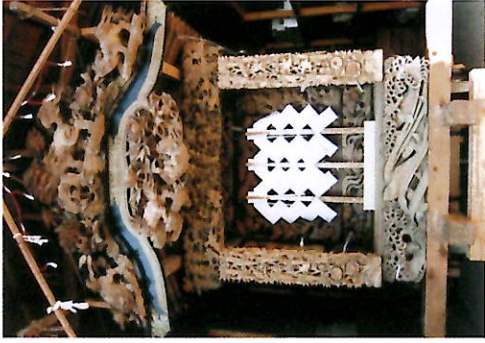




一番 西根屋台

この屋台は白木造り、白木彫刻屋台であるが、破風板、脇障子枠などは黒漆塗、高欄は朱漆塗である。



江戸時代の安政2年(1855)、地区住民によって建造された。

大工棟梁は梶倉蔵、彫工は富田住礒辺儀衛敬信である。

前面鬼板と懸魚は、唐獅子の子落とし。後面鬼板と懸魚は、鷹が兎を狙う構図で、いずれも上下が一体となった見事な彫刻である。

内障子、脇障子は菊。障子回りは葡萄に木鼠。車隠しは波に蛸、海老など魚類が目を引く。



二番 田中屋台

この屋台は漆塗造り、白木彫刻屋台で、構造材は黒漆塗、高欄は朱漆塗である。



江戸時代の嘉永7年(1854)、地区住民によって建造された。

彫工は富田住礒辺儀兵衛敬信のほか、数人が手掛けている。

屋台の6本の柱は、細かな貝を貼り付け磨き出した「螺鈿細工」で、美しく輝く。

前面鬼板と懸魚は、波に飛龍、後面鬼板と懸魚は、牡丹に唐獅子である。

内障子は牡丹に7匹の唐獅子、脇障子は牡丹に孔雀が見事である。



三番 門前屋台

この屋台は白木造り、白木彫刻屋台であるが、一部破風板は黒漆塗である。



建造年代は不明であるが、屋台の様式や彫刻の作風などから江戸時代末期と見られる。

彫工は結城住野村幸吉。後に瀬川住大出常吉が補刻している。

前面鬼板は、波に飛龍、懸魚は松に鷹、琵琶板には麒麟がいる。

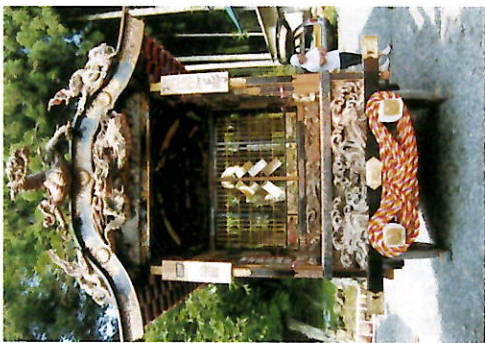
後面鬼板は、籠彫りの鞠をつかむ唐獅子、懸魚は飛龍である。

水引の梅と錦鶏は着色され、これに続く柱隠しには山鵲が飛ぶ。内障子は鋸引きの菊。



四番 上町屋台

この屋台は黒漆塗造り、銚金具付きの華麗な彩色彫刻屋台である。



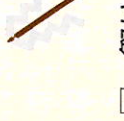
江戸時代の文化5年(1808)、鹿沼中田町で建造されたものを、明治6年に当町で譲り受けた。

彫工は日光五重塔彫物方棟梁を務めた後藤周正秀である。

前面、後面の鬼板は、丸彫りの龍で、胴体が後方に伸びるなど、その姿は迫力がある。

脇障子は禅宗寺院にみられる火灯窓。

高欄下は波に金色の龍、また車隠しは波が幾重にも連なり、豪快な彫りとなっている。



祭りと付け祭り

□ 祭りとは

祭りとは毎年定まった日に身を清め、神様に供物を捧げて祈願することである。神職の先導のもと、氏子が神前で厳かに行う祭典、儀式こそが本来の祭りである。

例祭はその神社の祭りの中でも、最も重要な祭りであり、祭神に降臨を仰ぎ祈願する。



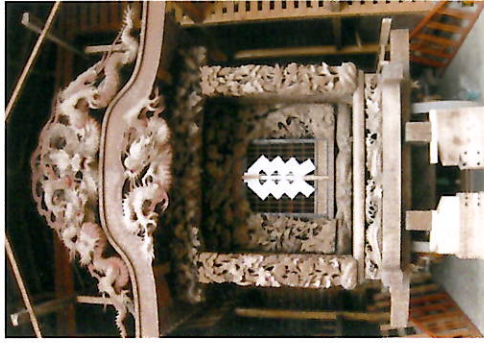
□ 付け祭りとは

これに対し付け祭りとは、神社を祭る氏子、特に若者が中心となる祭りである。その内容は祭礼当日、町中に屋台や山車を繰り出し、踊り屋台で手踊り狂言などを行うことを指す。厳粛な儀式を離れ、賑やかな余興が行われる。



五番 下町屋台

この屋台は白木造り、白木彫刻屋台で、すべて白木で統一されている。



江戸時代の安政3年(1856)慶応2年(1866)、地区住民によって建造された。

彫工は富田住礒辺系統と伝えられる。

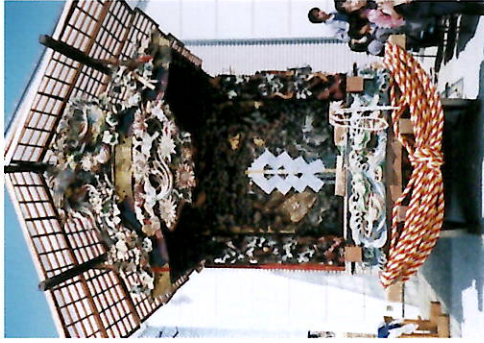
彫刻は龍を基調とし、前面鬼板、懸魚は共に龍、後面鬼板も対面する2匹の龍である。後面懸魚は、波間に浮かぶ金色の宝珠の図柄。

水引、柱隠しは手の込んだ葡萄に木鼠。内障子、障子回りは共に菊。高欄下は飛龍、車隠しは菊水である。



六番 中町屋台

この屋台は黒漆塗造り、銚金具付きの華麗な彩色彫刻屋台である。

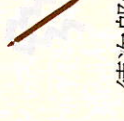


江戸時代の天保7年(1836)、宇都宮新田町で建造されたものを、安政年間頃譲り受けた。

彫工は鹿沼住石塚直吉吉明。後に大出常吉が車隠しを彫っている。

前面及び後面の鬼板は、いずれも鮮やかな桐に鳳凰。懸魚は菊に山鵲である。

柱隠しは葡萄に木鼠。内欄間、内障子は緑色の松葉と紅葉した葛が一面に彫り込まれ、金色の鷲が向かい合う。高欄下は丸彫りした蛸と海老がほほえましい。



徳次郎の屋台囃子

徳次郎六カ郷には、各町会にお囃子保存会があり、屋台の巡行に合わせてお囃子が演奏される。お囃子は彫刻屋台の建造とともに、周辺地域から修得したらしく、明治期以降盛んになった。

徳次郎六カ郷のお囃子は、基本的に江戸囃子の系統を受け継いでおり、小太鼓2、大太鼓、笛、鉦の5人1組で演奏する。

曲目としては新囃子、小天、鎌倉、神田丸、四丁目の5曲（一般には五段囃子）が代表曲であるが、屋台巡行時は、圧倒的に新囃子が演奏される。

徳次郎のお囃子は、2つの流派に分かれており、奇数番の西根、門前、下町は『新宿流新囃子』、偶数番の田中、上町、中町は単に『新囃子』と称し、互いにその技を競い合う。

